経営学部創設40周年へのメッセージ

鵜澤昌和

私は，1968年（昭和43年）から1988年（昭和63年）に至る満20年間青山学院大学経営学部に在籍し，その間，学科主任，図書館長，経営学部長，学長などの職務を歴任しました。退任後間もなく1990年には経営学部創設20周年を迎え，本論集（第5巻第1号）に「経営学部での20年を回顧して」と題する小文を掲載させて頂き，更に2000年には創設35周年を迎えて「経営学部創設35周年へのメッセージ」を本論集第35巻第3号に掲載させて頂いたので，今回は3回目の創設記念メッセージということになります。

20周年のメッセージは，中年をはるかに過ぎた私自身が何故経営学部に在籍することになったか，そして経営学部でどのような講義と研究をしてきたかといった，私自身に関することを中心とした内容のもので，20周年を祝うメッセージとして相応しくなかったのではという反省が今でも残っています。次の35周年のメッセージで.は，学問の分野から離れて経営学の門外漢に堕しつつある立場の人間が，経営学へのノスタルジーを持ち，アウトサイダーとしての無責任な状態を逆手にとって，遠くから日本の経営学の現状を望見しての2つの思いを僭越にも記しました。

その1つは，「経営学の基盤整備」についてであり，他は「IT（情報技術）時代の経営学の方向」についてであります。何事も，基本が重要であり，基本の確立あってはじめて大きな発展が可能であることはすべての問題にあてはまる原則といえますが，とかく基本は未整備のままで，徒らに新奇なこと，時流に乗ったことにのみ関心が集まり，しかも基本の事柄を取り上げること自体，さまざまな理由から敬遠されるのが一般に見られる傾向であり，経営の研究に於いてもこのことが当てはまるのではとの思いがあったので，青山学院経営学部の優れたスタッフにこの問題を提示して，研究の参考にして頂くべく，記したものであります。内容は経営学の本質について，（科学たりうるか，技術論か），経営学の方法について，経営学の領域について（商業学，会計学，経営工学，管理工学などとの関係，学際化，分化と統合など），経営学の対象について（営利私企業中心の状況に対して），経営教育の方法について（ケースメソードの評価なども含めて）など，基本の基本ともいうべきことの研究への期待を表明したのが前者であります。後者の「IT時代の経営学」については，多くの人々の予想をはるかに越えた情報技術の発展とそれの経営への強烈な影響を予見し，かつその負の影響を怖れて，これからの経営の研究が，その

ような問題に対して適切な対応をすべきことを強く望んで記したものでありました。

今回は，以上のような35周年のメッセージ執筆から早くも5年が経過しており，青山学院を離れてからは既に17年を経て，時の経過のあまりに早いことを改めて痛切に感じると共に，青山学院そのものの現況，特に経営学部の現状について全く情報を持っていない自分自身にも気付いて，淋しさを覚えると共に，今回のメッセージは不適切なものになりかねないと心配されます。

たまたま手許に昭和53年（1978年）の経営学部スタッフのリストがあり，以下の方々の名前が記されていますが，現存の方は僅かであり，これらの方々をご存知ない先生も多いのではないかと推察します。このリストに記されているのは，雨宮，福島，羽田，日比，稲垣，石川，伊藤，岩元，北見，小林（望），古閑，クランメル，栗山，守永，岡下，奥村，大島，坂井（幸），坂井（正），柴川，相馬，鈴木（清），鈴木（安），徳久，徳重，鵜澤，ウイルキンソン各教授（27名），小林（保），九頭見，松林，杉山，寺谷，寺東，東海各助教授（7名），小林（三）講師，合計35名です。結局，私が勤務した頃の経営学部と今日の経営学部とではすべての点で様相が一変しているのではないかとさえ想像される次第です。

情勢の変化の一例として思い浮かぶことの一つに次のようなことがあります。20周年のメッセージにも記しましたが，私が企業に在職していた1967年に，当時の経営学部長桜井信行先生から経営学部への就任のお話を頂いた際には，私の業務経験から考えて担当科目が事務管理か内部監査の何れかではないかと直観的に考えたのですが，桜井先生からのご指示はそうではなく，情報システム関連の科目ということでありました。たしかに私自身が特に興味と関心のあった監査については，当時殆んどの大学の経営系統の学部でも取り上げられる例は少なく，あっても会計分野での会計監査についてであり，幅広い業務監査は皆無であったと思われます。ところが，近時のわが国の経営では透明性，社会的責任，コーポレートガバナンス，コンプライアンスなどの点が重要な問題となっており，内部統制の整備，内部監査の充実等が強く求められています。これらの企業の動向に対応して，経営の研究面にも内部統制とか監査の問題が重要な位置を占めるに至り，青山学院大学に於いても，八田進二，松井隆幸，鈴木豊，橋本尚各教授など当該分野の方々の活躍が見られ，これらの点からも時代の変化が強く感じられます。

監査と青山学院経営学部の双方に関係することで，興味あることがらがあります。内部監査の研究，普及を目的とする団体，日本内部監査協会では，故青木茂男早稲田大学名誉教授の業績を記念して，監査に関する優れた著書，論文を選定して表彰する「青木賞」の制度があり，1987年の制度創設以来私が審査委員長の任にあります。ところが，1987年の第1回に大矢知浩司教授，2001年の第15回に八田進二教

授及び松井隆幸教授（当時は拓殖大）のそれぞれ別の論文，そして2004年の第18回には鈴木豊教授の著書が選ばれ，同協会の年次大会の席において私から各氏に表彰状或は目録などをお渡ししてきましたが，この4名の青山学院大学の先生方と私とは，共に青山学院の関係者でありながら，大矢知先生以外は青山でお会いしたことは無く，いずれも表彰の時が初対面であったことは，私にとって青山が将に遠い存在となってしまったことのあらわれであり，また，第1回以来合計24名の受賞者中4名を青山学院大学経営学部に関係ある方々が占めるという，他大学に例のない状況は，本学が監査の研究に於いて他に抜きん出ていることを示すものであり，このことも私の在職時代との変化の大きさを示すものとして感慨ひとしおのものがあります。

ここで話題をかえて，当時のオフタイム事情の一端を述べることとします。現在，経営学部に属する方々がどのような交わりを持たれているのか，その辺の事情は全くわかりませんが，私の在任中は，経営学部の中にゴルフ愛好者が比較的多く，ゴルフでの交友が盛んであったと思います。そのことの最大の原因は，土田教授の発案になるTGS（土田ゴルフスクール）の形成にあり，土田先生の世話好きなご性格，そしてある意味での親分肌に依るものといえましょう。TGSの名称はスクールであり，土田先生自ら校長を名乗って居られましたが，実態は何の束縛もない気楽なゴルフの集まりであり，一応の会則もありましたが，年に何回かの例会はいわゆるプライベートコンペティションで，優勝からブービー賞迄の賞が設けられ，全く楽しいゴルフ会でした。メンバーは経営学部のスタッフを中心とし，経済学部，文学部など他学部と事務職員のゲスト，さらにメンバーの友人である他大学教授なども僅かながら加わり，まことに賑やかで楽しい集まりでありました。殆ど全員が常連であり，皆勤者多数で，土田先生ご退任後もある期間続き，良き思い出となっています。始めの頃は三鷹のICU（国際キリスト教大学）附属のゴルフ場で行われ，後には五日市カントリークラブが定番の会場となりましたが，土田先生の兄上森元紀美雄氏が所有される伊豆天城高原の別荘（諏訪の300年前の古民家を移築した素晴しい温泉付別邸）精良館（せいりょうかん）に宿泊して天城高原のコースでプレイするという場合もしばしばあり，この時の楽しさはまた格別でした。森元氏の明るく親切なお人柄と，その見事な料理の腕前，そして豊な温泉という，ゴルフ，料理，温泉の三点セットは格別なもので，さらに一部の人はこれに麻雀が加わって満点のリクリエーションとなりました。常連中の常連は，土田校長をはじめとして鈴木（ドクター），徳久，守永，稲垣各教授であったと記憶し，坂井（幸），清水，森本各教授の外，他学部よりの気賀，牧野，野村教授などもメンバーであり，坂井（幸）先生は当時ゴルフ部の部長であられたが，ゴルフの腕前については？というのも愉快なことでありました。思い出は尽きませんが，すべては過ぎし昔のことで

あります。現在の経営学部の方々のオフタイムの交わりは，更に一層洗練された楽しいものであるかとも思いますが，ここまで書いてきて思うことは，現職の方々と，我々OBが折に触れて気軽に接触でき，互いに語り合う時と場が与えられればということです。たしかに名誉教授室が設けられてはいますが，あまり利用されていないのではないでしょうか。企業では，社友会などとしてOB間の交わりが続けられたり，OBと現役との交歓の機会が設けられたりする例も少なくないと思いますが，とくに積極的な配慮がなされない限り，この種のことは実現しにくいのかも知れません。

以上，とりとめのない雑文となりましたが，関係者諸賢にとって多少の参考となり，或いは興味を喚起するものとなれば幸いであります。

経営学部の充実，発展を願って筆を擱きます。